

大流動の時代はじまる



再編成期迎えた国際環境

〈対談〉

陸

井

三

郎

中

嶋

嶺

雄

(アメリカ研究所長)

(東京外国語大学助教授)

中嶋 キッシンジャー外交は七〇年代の前半に、非常に華麗な頂上外交として展開された。デタント(緊張緩和)の旗印をかかげて七〇年代前半の国際関係を規定してきたわけですが、それは考えてみると、アメリカが世界の超大国として幾つかの切り札を持っていたから可能だったと思うのです。六九年あたりからアジアの問題をニクソン・ドクトリンに基づいて処理しながら、ベトナム戦争でジレンマに陥っていたアメリカ外交の選択肢をふやす一方、国力を背景にし

た切り札を手にして、米ソ関係、米中間を軸に頂上外交を繰り広げた。キッシンジャー外交にたいしては、スタイルは新しいがその本質は一九世紀的な勢力均衡外交にすぎないといった批判がアメリカ国内にもあったのですが、アメリカの切り札が有効なうちはその「新しさ」が大いにアピールしたし、それなりの貢献をしたと思うのです。

しかし次第に、アメリカの切り札を連続も計量し始めたし、中国も計量し始めた。このあたりからキッシンジャー外交の持っていた一種の「マネーバビリティ」が低下していく。つまり時流を大きく変えることはできなくなったものの個々の問題の解決という点ではあちこちで壁にぶつかってしまったと思うのです。大国関係でも、最近の米ソ関係は、新通商法のいざこざや第二次SALTの行き詰まりにみられるように、必ずしもしっくりしない。米中関係も急進展するという状況ではなくなってきました。一方、ヨーロッパの問題や中東問題も然りで、キプロス紛争も含めて、キッシンジャー外交は深刻なジ

レンマに陥った。そこへもってきて今回インドシナ半島の情勢が急変した。キッシンジャー外交の限界を、チユー政権の側から逆に突かれたような形です。そういう点でいま米国の外交そのものをめぐる国際環境が非常に厳しい。

デタントの枠組みの崩壊

陸井 キッシンジャーは非常に有能な外交官で、戦略家でもあるわけだが、キッシンジャー外交はキッシンジャー本人

だけがやったわけでは別れない。スーパーパワーとしての米国の力を背景にして初めて可能だったわけで、いま幾つかの切り札と言われた、その切り札が何だったのかは一つの問題です。私は「データ」を緊張緩和といわないのが持論です。それは米中、米ソの大国間取引という、含意的ではあるが、大国間で現状維持をはかるという暗黙の了解を含んでいるという感じがします。「中ソの取りつかれたような相互不信をけしかける」という言葉をキッシンジャーは使っています。



氏がろうさぎ いがく

すね。米中、米ソの二つのワケ組みで、世界の現状凍結と一種の縄張り協定をやろうとした。これがデータといわれるものの最も簡単な図式だったと思う。それがいままでもわりにもっと機能していた場所は、アジアでは朝鮮半島です。それから西欧と東欧の間。それ以外のところではなかなかうまくいかない。

もう一つ、政治的な次元の問題と、それから西側諸国の中で一番力の強いアメリカという国の、世界経済の中でこの問題があるんじゃないか。アメリカ自体の、たとえば多国籍企業に代表されるような

力は引き続き非常に強力で世界に伸びていますが、同時に一国的規模でのアメリカ経済を見ますと、ドルの地位一つとっても、西欧、日本に対する相対的な地位低下は明白ですし、それから外に出て行った多国籍企業がアメリカ国内産業をつぶしていくような事態があるわけですね。今年は五五〇億、というような大幅赤字の予算を組んで、それでなお景気の回復ができないような落ち込み方をしている。その限りではいいですと、ある意味でカネの力で動かされたアメリカの外交、その幅が狭くなってきたことは否めないように思う。かつてのような対外援助予算などははや組めない。

パリ和平協定以後のサイゴン向け援助は経済援助を含めて八一億、という。いま懸案の三億追加援助などは問題じゃないわけで、この追加援助があると思えるまいと、事態はそんなに違わないと思います。アラブの石油戦略についてはいろいろ評価があり、裏でキッシンジャーがやらしたといううわさまであった。しかし、エクソン、ガルフ、シェルなどのメジャーが巨額の収益を上げると同時に、アラブ諸国にオイルダラーが大量に流れ込み、その結果、アラブ諸国の方も独自の態度をとり始めて、米国のコントロールがきかないような政治・経済情勢をつくりだすという矛盾した両側面があったと思う。

その意味では、中東とインドシナは、世界の大きな二つの核です。アメリカ外

交にとっても、最も重要で神経を消耗するところですね。そういう地域でキッシンジャー外交の失敗が露呈されてきたのは、米国の資源戦略、ことにエネルギー戦略の上でも非常にゆゆしい事態です。大体七〇年代が中東と北アフリカと北海、八〇年代はアジアの石油という考え方でエネルギー戦略が展開されている。アジアでは、ちょうどインドシナが中心になる。そういう意味で長期的にアメリカの戦略を見ると、やはりインドシナ情勢には放置しておけない重大な利害がからんでいると思います。

中嶋 私も今回の事態は、ある意味で日本にとっても、いわばデータ外交、緊張緩和に対する一つの教訓として、考えなければいけない問題が多いような気がしますが、冷戦的価値観に逆行しては困るのですが、データは六〇年代の後半のドゴール時代にフランスのクーブドミューブルあたりがよく用いた言葉で、ビストルの引き金を緩めるとか時計のバネが緩むというのが語源ですから、緩めば両端に緊張がしわよせされる。つまり、大国間の緊張緩和によって中小国に緊張がしわよせされた。

データ外交には幾つかの与件が必要ですね。現状維持、平和共存、それに社会的な成熟というか、一種のスタビリティ(安定)という与件が満たされて初めてデータといえるわけで、いま問題になっている地域は、中東にせよ、インドシナにせよ、そういう条件を全然欠いてい

る。そういう地域をああいデータ外交のワケ組みの中に引き込もうとしたところにそもそも無理があった。インドシナ半島の場合、解放勢力が民族民主革命、あるいは民族解放闘争という問題を提起している限り、和平協定のワケ組みでおさまるはずがない。アメリカの利害、さらに中ソの利害があつて、それを強引に協定に組み込もうとしたけれども、その仕組みがいま大きく崩れつつある。やはり、根本的には大国の利害のワケ組みにおいてインドシナ半島を犠牲にしてきたという点に問題の宿命性があつたという気がします。

ただ、今回のチュー政権の軍事的後退には、ある意味でせつ詰まった者の居直りのような面もあると思うのです。これにアメリカがどう反応するか、また中ソは依然として対立を深めながら、大国関係では七〇年代に形成されたそれぞれワケを崩そうとしていないわけですから、これにどう対応するか、こういった問題があります。キッシンジャーはこの状況を見通していたんでしょか。

随井 データとはもあれ戦後続いた世界構造をこわした。いったん根底からこわして、非常に不安定なものにした。一方で力関係の現状維持をはかりながらも、他方では世界政治の仕組みが不安定になることを、キッシンジャー外交はある程度織り込んでいたと思います。そうでなければ、世界を飛び回る、ああいウキッシンジャーのやり方はあり得ないわ

けです。リンケージ（連関）という彼の発想も、あっちこちの問題が連動している、そこを手当てして歩くということですから、ある意味ではアメリカの力の相対的低下を自覚した上に成り立っていたと思うのです。その点、キッシンジャー外交が一時高く評価されたことには、それなりの理由があった。

泥沼のベトナム戦争を一応終結させたこととか、中東でも一度はまあ成功したということ、それからポルトガルの植民地戦争をやめさせたというの、ひとまず評価された。ところが、その後、キプロスでも、ポルトガルでも、エチオピアでも、必ずしも思うようにいかなかったらうえ、中東とインドシナがおかしかった。西側経済が成長しているうちにはあまり露呈しなかった問題が出てきた。外国援助に大きく依存している政権などには、どうしてもガタがくる。また、それを米國がコントロールすることもできなくなってくる。では、米國はどうするか、という問題ですが……。

不可能な米軍再介入

中嶋 多国籍企業対策とか産油国対策とか、いろいろな問題がからまっているうちに、来年は大統領選挙がある。カンボジアについては、米政府もある程度あきらめていると思いますが、南ベトナムではチュウ政権が追い詰められた者の居直りみたいな形でアメリカに対して問題

を提起している以上、やはり米國は一つの大きな選択を迫られていると思う。フォード政権が議会とかかわりなく、空軍力や海軍力の展開に至るような一つの賭けをする可能性があるのかどうか。

陸井 ロストウは海兵隊の北ベトナム侵入を主張している。フォードの相談役にデイーン・ラスクまで顔を出す。しかし、これに関連してベトナム問題の経過をもう少し見ますと、ジュネーブ協定のときに、すでにデタント的なワクがあった。南北ベトナムの暫定軍事境界線について、ベトミン（ベトナム独立同盟）は一六度線を主張していたのに、米仏密約を中ソが呑んで、一七度線になりました。今度アメリカの示唆でそうなったのかチュウ政権の考えだったのか、諸説ありますけれども、少なくとも容観情勢として支えきれないという条件が出てきておそらく第三、第四兩軍区ぐらいを最低防衛線として固めるといふ線だったと思います。これは一種のなだれ現象です。アメリカ軍の再介入は不可能です。いままでの経験からいって、かりに南爆の可能性があるとすると基本的に事態を変えろという要件にはもはやならない。すでに一七〇〇億の戦費を費消し、一五〇〇万の爆弾を落としている。あと何万、何十万、落とすとしても、政治的事態を変えることは不可能だと思えます。また、それぐらいのことはキッシンジャーも知っています。

中嶋 ただ、このままベトナムが推移

してしまいかどうかですね。私は、まだ一ぱい波乱も二波乱もあるような気がしますが……。

陸井 アメリカとしては、戦略的にも将来のアジア政策から見ても、少なくともコーチシナの南半分は何としても確保しておきたいでしょう。そうでなければ将来の南北ベトナムの統一問題もデタントのワク組みの中におさめることができないうわけですから、おそらくあらゆる手を打つと思う。もつともチュウ氏がどうしてもだめなら馬を替えることも当然考えているでしょうが、それで成功する可能性があるとは思えません。

キッシンジャーは大国外交はかなりわかったと思うのですが、ベトナムの場合はどうかな。あそこでは解放勢力を根絶やしにするために、農村人口を追い立てて難民をつくるという政策がとられた。難民は生産点から切り離された。だからチュウ政権の支配領域が広がり、人口が都市に集中するにつれて、外国援助がふえないと持たないことになる。パリ協定後二年間にチュウ政権の領域で生産が再建できる条件があれば別ですけれども、南ベトナムは農業国で、その農民を追いつたわけですから、新たに植木させ民は今度またふえますね。そうすると、また米國は援助をふやさなければならぬ。そういう矛盾がある。アメリカの援助がなければ生きていけない。チュウ政権のアクセラは軍事的なものより、むしろパリ協定以後の経済にある。かろうじて外貨収入の源泉になっていた産業も、世界不況で全部だめになった。材木とか、冷凍エビとか……。

中嶋 インフレや反チュウ勢力の台頭などでチュウ政権にガタが来ていることは事実でしょうが、あれほど脆弱な体質のチュウ政権が、七年ももっているんですね。そういうことを考えてみますと、たとえチュウ政権がまもなく崩壊するにせよ、サイゴン側の人々には、この戦争を何のためにたたかってきたのかという一種の断末魔のナシヨナリズムみたいなものがかなりあると思うんです。それに解放勢力なり、北側に対する憎悪の反共意識がありますから、そう簡単にサイゴンが崩れないんじゃないか。意外に日本人の持つ危機感とは違ったものがある。それだけにアメリカにとっても非常に問題が大きいような気がします。カンボジアの場合でも、何とんでもシアヌーク殿下の北京滞在がもたらすデメリットがある。こういう点を少し考えると、これほどの危機的な状況にもかかわらず、問題はかなり増幅される可能性があるという気がします。

陸井 ブノンペンにしても、サイゴンにしても、この勢いで解放勢力が占領しちゃうことは考えられない。ですから、ロン・ノルが亡命し、チュウも同じようなことになったとしても、まだアメリカがマヌーバリングをやる余地がなくなるわけじゃない。ただ大変なカネがかかる

んじゃないか。そしてその金はいくらもない。私も、チュウ政権下に反共意識があることは否定しないが、一方、ホー主席が死去したとき、サイゴンでみんなが泣いた事実、テト攻勢のときにサイゴン市民がよるこびを隠せなかった事実をどうみるか。今回の攻勢も、解放勢力が一挙に南下してきたというよりも、サイゴン軍の遁走したあとに、土着の勢力が決起したという要因が大きい。解放されたユエ、ダナンでも、市長や革命委員会幹部はみな第三勢力をふくむ土地の人びとで、外からの「侵略」じゃない。

ジレンマに悩むソ連

中嶋 中ソの側にもいろいろ問題がある。中ソ対立はいま、ある意味でグローバルな形で進んでいる。最近の中国は、国際情勢を天下大乱と規定しています。対ソ政策も一時のようなソ連の侵略に対する戦争準備ではなくなってきた。最近の全中国人民代表大会の周恩来報告にもあるように、ソ連は「東に声をあげて西を撃つ」、西というのは必ずしもヨーロッパではなくて、あらゆるところで中ソ関係が幾つかの問題を持つということ、それに備えよということだろうと思えますけれども、そうなりますと、中ソ対立は単に国境をはさんだ軍事的対峙というよりは、むしろグローバルな国際戦略の対立になりつつあると思うんです。この一月初旬、中蒙国境地帯を旅しました

が、あの辺の緊張は非常に緩和している。それだけに外交戦略上の中ソ対立はますます激しくなっていると思えます。日中平和友好条約をめぐる中ソの外交攻勢もそうだし、ソ連のアジア集団安保構想、ないしはそれをバックアップする形での海軍力の増強に中国が非常に神経質になっているという事態もある。インドシナは、ある意味でこれまで中ソがそれぞれ外交政策の焦点を合わせてきたところですから、その将来も中ソ対立と無関係ではないと思うんです。

この問題は、ソ連にとっても大きなジレンマではないか。ソ連はバリ協定以降、南北ベトナムの分断を固定化することに、かなり期待を持っていたように感じられます。サイゴン政権と裏交渉をしたという情報もある。昨年一月にパラセル群島(南シナ海)で中国とチュウ政権が衝突したとき、ソ連は中国を支持しなかったばかりか、暗黙のうちにサイゴン政権を認めたような立場をとりましたね。現状固定というか、ある意味で朝鮮戦争型の解決を望んでいたソ連にとっては、事態が今のように流動するのは困惑のかぎりでしょうし、事態がソ連のこれまでのアジア政策に影響することを最も恐れると思うんですね。米ソ関係の亀裂を恐れる気持ちもあると思えます。

一方、中国はインドシナ半島の最近の情勢を一応は全面的に高く評価しています。インドシナの革命は成功寸前であるというキャンペーンを盛んにやっています。

る。しかし北ベトナムがある意味で中ソ双方に対する主体性を持っているという現状では、中国の期待通りに事態が展開するかどうか。中国内部でも、全国人民代表大会で毛・周体制が固まったとはいえず、米中関係などについては内部に問題が残っています。シアヌーク殿下がずっと北京にいて、そこで王国連合政府をつくっているというところは、中国にとって大きなメリットでしょうが、インドシナ半島との長期的な関係からみれば、逆にアメリカの方が大きいかもしれない。

シアヌーク殿下にしても、将来を考えて、今度は「中国の影」を薄めるためにソ連との関係を考えなおすでしょうし、ソ連もそれを望んでいる。ロン・ノル政権をようやくソ連が見限ったことにたいしても、シアヌーク殿下は「今ごろになってなんだ」とはいわずに、感謝の意を表明しています。一方、中国がいまのような形でカンボジアやベトナムにアプローチしてゆくことを許容すればソ連の反発を招く恐れもあります。全般的には確かに中国の影響が強けれども……。

今回の全人代のと、姚文元や張春橋が長大な論文を発表して一種の「まきかえし」に出ているように思われる点も気がかりですし、キッシンジャー外交の行き詰まりで、中国外交が一段と革命的になるかもしれない。とすると、アメリカ側の対応がこれから問題になりますね。

中嶋 そうだと思えます。その意味では自信を持っているでしょうね。

中国が天下大乱を公式にいい出したのは、七三年元旦の『人民日報』社説からです。このときの中国には林彪事件の余波があったし、対米接近に対する国内的

テストされる中国外交

陸井 アメリカは中国外交の、いわば

建前部分と実質部分を区別しているようです。例えば中国は台湾解放のスロークルをおろしていないけれども、アメリカ資本はニクソン訪中以後に台湾に大々的に進出した。第三世界は大国の植民地からは脱したけれども、経済的には植民地時代のモノカルチエアとか、世銀、アジア開発の借金奴隷になるなど、いろいろ問題をかかえている。その第三世界を中国が本当に代表しているのかどうか、いささか疑問ですね。一方で革命的なことを口にししながら、他方では米国に接近する。少なくともアメリカ側は中国がデタント、つまり現状維持を望んでいると考えていた。だからベトナム問題では、ベトナムの当事者よりも、まずソ連や中国と話し合いをした。今度も国務省筋は、パリ協定後一カ月後に開かれた和平保証国際会議をもう一度開こう、大國間のワケ組みを再確立しようという意図を示しています。これにベトナムの解放勢力がすんなり応ずるとは思いませんがソ連のジレンマのような要素は、かなり中国にもあるという気がします。

われわれはインドシナ問題を原点からとらえなおす必要がある。あそこで世界最大の米国は史上空前のコンピュータ戦争をやった。これに対して最後まで抵抗したベトナムの人々は、ある意味で世界の人間的な側面を代表していたと思うんです。第三世界全体が持っている問題をベトナムの抵抗戦争が代表してきた。南ベトナム民族解放戦線その他の文献

も、そのことをかなり自覚的に示しています。アルジェの第四回非同盟諸国会議でブーメジエンがデタントは大国と第三世界の関係をかえって緊張激化させる危険がある、第三世界の存在を無視しては世界平和はあり得ないと演説し、その趣旨が満場一致で決議されましたが、これはベトナム解放勢力の考え方を代弁したものです。米中、米ソの大国間で物事を決める発想に抵抗している。中国自身は第三世界に属しているというけれども、大國関係を重視している側面も無視できない。



氏おねみ なかじま

中嶋 ベトナム戦争の当事者の頭上を飛び越してニクソンが訪中したとき、『ニヤンザン』（ベトナム労働党機関紙）などが激しく反発しましたが、第三世界が中国を信頼しているかどうかは確かに問題です。パングレラデシュ独立でも中国の行動がテストされた。中国はその主張と背離するような行動をとったのではないかという第三世界の側の不信感があつたと思います。伝統的にアジアは中国の「裏庭」であり、インドシナを含めて中国の影響力が強いだけに、アジア各

國は非常にリアルに中国を見ている。中国外交の揺れのために、いつもアジア諸國は犠牲になった。ASEAN（東南アジア諸國連合）五カ國ではマレーシアがようやく中国と復交しただけで、一時は米中接近や日中復交に伴ってASEAN各國がドミノ的に中国との国交を正常化する予測されたにもかかわらず、現実はずなっていない。ここには明らかに中国との潜在的ギャップがありますが、このギャップを中国が本気で埋めるつもりなのかという問題が、インドシナでも提起されているように思います。

學のシンポジウムで出てきます。かなり世界市場や資源の問題とかかわり合った戦略として提起された。ソ連についても同じことがいえるわけです。だから条約や協定の成否だけで、成功とか失敗とかいうふうにはなかないきれない。国際収支が赤字になっても、紙幣を自分の國で印刷して払える國はアメリカだけなんですからね。米國がドルの事実上のダンピングをやれば、日本や西歐諸國が買ひ支えなければならぬ。そうしないと、経済的ダメージを受けるというふうな、アメリカがひちゃくちやをやった場合に尻ぬぐいをせざるを得ないような経済構造がまだある。だからアメリカがまだ独自の戦略を展開し得るような条件は、そう簡単に崩れるものじゃないと思いますね。それに、多國籍企業に代表されるアメリカの経済力は大きいに伸びている。

「賭けの外交」の高いツケ

中嶋 私はキッシンジャー外交には厳しい点をつけた。これまでアメリカの対外姿勢はかなり漸進的でした。ところがキッシンジャーは漸進主義から一挙に転じてアジアからの撤退も大いに急いだ。そのために大國間の緊張は緩和されなければ、そのしわ寄せがアジア各國、あるいは中小國に全部おっかぶさってきた。大國関係以外の緊張緩和は全然なされてない。そして今日のような情勢が生まれたことを考えると、ある意味

ではいまアジアはアメリカの「賭けの外
交」の高いツケを支払っているんじゃないか
という気がしますね。パリ協定をこ
破算にするようなベトナム情勢なども、
キッシンジャー外交の大きな代価でしょ
う。きめのこまやかさを欠いていたとい
う点では、キッシンジャー外交には大き
な欠陥があると思う。

中東問題もそうです。今度イスラエル
がなぜあれほど強硬に出た、キッシンジ
ャーの調停を行き詰まらせたのか。ここ
一カ月ぐらいインドシナ情勢が非常に悪
化することを見通した上で、会議の席で
妥協した場合、どういふことになるかを
十分考えた形跡がある。

陸井 カウンター・リンケージ（逆リ
ンケージ）ですね。キッシンジャーのリ
ンケージ戦略が裏目に出て、中東はベト
ナムの影響をじかにかぶっている。
具体的にニクソン、キッシンジャーの
外交の経過を見ると、これはもう文字通
り力をもてあそんだ、むちゃくちゃのも
のでした。大中間でデタントをやりなが
ら、B52で猛烈な北ベトナム爆撃をや
る。きわめて反人間的な外交路線です。
キッシンジャー以前からベトナム戦争は
本来そういう反人間的な戦争でしたが、
それがニクソン、キッシンジャーの段階
でむしろ増幅された。

中嶋 にもかかわらず中ソともに、そ
ういうキッシンジャー外交を受け入れて
きたわけですから、相当な責任がある。
陸井 そう思いますね。だから「沈む

ボートに浮き袋を投げ与えるようなな
…」という「ニャンザン」の表現が出て
きますし、七二年六月にはレ・ドク・ト
がブルガリアで暗に中ソを批判する演説
をしている。

容易でない三大国の合意

陸井 アメリカが今後も従来の外交バ
ターンを踏襲するとすれば、いまだ動乱傾
向にある第三世界、特に中東とインドシ
ナの問題を、またまた大関係のワク組
みで解決しようとするでしょう。その場
合、アメリカ国内で、また国際的にコン
センサスが得られるかどうか。また中ソ
が応じてくるか。さらに中ソが応じたと
しても、今度は第三世界の側が受け入れ
るか。大いに問題がある。

アメリカ国内の問題ですが、外交に関
する限り、あとから批判を受けるかもしれ
ないけれど、一政府が強引に行動する
ことができる。だから国際会議や大中間
の話し合いについては、ホワイトハウス
や国務省にもまだイニシアチブをとる余
地がなきにも非ずです。それから中ソ
の対応ですが、これはそう簡単じゃな
い。中東問題の一方の主役であるソ連の
場合、アゼルバイジャン問題のころから
中東の動きには非常に敏感で、P.L.O
（パレスチナ解放機関）などにも微妙な
気の使い方をしなければならぬから、
当事者抜きでアメリカとの妥協に応じ得
る条件にはない。またインドシナでは、

当事者が納得しなければ、もう中ソとも
に出られないですね。アメリカとしては
完全に手詰まりじゃないでしょうか。当
面つぶれなかったブノンベン政権とサイ
ゴン政権を、現地指導者を変えてでも何
とか支えて、時間かせぎを最大限にヤ
る。それで情勢を立て直すチャンスをや
うかがうつもりでしょう。もう手おくれ
で、かなり試行錯誤が多いと思いますけ
れども。

中嶋 短期的には、アメリカがもう一
度何らかの形で和平のイニシアチブを取
ろうとする場合、やはり中ソは応じてい
くと思うんです。しかし長期的には、イ
ンドシナに対する中ソの影響力の競合と
いう問題が残るから、米中ソ三大国の合
意は容易ではない。例えばカンボジアの
場合、中国はソ連とロン・ノル政権の旧
縁を激しく批判していて、将来の政権構
想で一致できる範囲はきわめて狭い。中
ソ対立という視点で見ると、インドシナ
問題の今後は、クレムリンと北京政権の
内部に大きな激動をもたらしかもしれな
いと思います。

ある意味ではキッシンジャー外交に乗
ったデタント外交の失敗ということ、
ブレジネフ体制の動揺も考えられます。
一方、中国としては、天下大乱という情
勢分析にもかかわらず、リアル・ポリテ
ィックに傾斜して、「革命外交」をおろ
そかにしたという批判を留保している部
分がある。「革命外交」と「国家外交」
の使い分けがむずかしくなり、中国の内

政に響いてくる可能性がありますね。広
く考えると、今回の事態は第三世界が社
会主義国をも含む大國に挑戦状を突きつ
けた形です。

陸井 南ベトナムでは六八年のテト攻
勢、七二年の春季攻勢、どちらも物凄い
アメリカの力の巻き返しがあったが、今
度はそれができない。そうしますとイン
ドシナ解放勢力、とりわけハノイは、米
中ソに対しても、第三世界に対しても、
国際的声望を大いに高めると思うん
です。

その点、今後の国際政治の大きなフ
ァクターになる。宮沢外相が対インドシ
ナ外交を再検討するといったり、ロン・
ノル大統領を亡命させるために大使引き
揚げの情報を流したり、てのひらを返し
たようなことをやる。あれは逆にいうと
インドシナ解放勢力の地位向上で、第三
世界へのインパクトは非常に大きい。

全世界にとつての結節点

陸井 アメリカの利害だけでなく、
資本主義世界経済に対する影響が大変
だ。第五次中東戦争が起こって、イスラ
エルが勝つという状況になれば、中東油
田爆破なども当然起こりますからね。

中嶋 中国は中東問題では距離も離れ
ているし、影響力もそうありませんか
ら、単純に産油国を支持してはいますが、
そこには第四世界の反応、アラブとソ連
の関係というような微妙な問題もある。

中東情勢がどうなっても中国の影響力が増大するとは思えません。

ソ連は、全般的に見れば、これまでの中東戦争でかなり利益を得た。それだけに、急いで平和解決をはかろうとするかどうか。

陸井 ヨーロッパの場合、特徴的だと思うのですが、フランスもドイツもイタリアも基幹産業をかなり第三世界に移していますね。例えばブラジルにはフィアットもあればフォルクスワーゲンもある。国際競争のために第三世界に工場をつくっているわけですから、第三世界に對するインドシナ情勢の刺激は、EC諸国のみならず全先進工業国にとって、アラブの石油がどうなるかというような単純な面だけじゃなくて、もっと根底的な問題をはらんでいます。例えばフランスはアフリカに大きな発言権を持っています。こんなことにもじかにはね返ってくる可能性がある。インドシナはアメリカだけでなく、全世界にとっての一つの

結節点、あるいは突破口ですね。

重大な岐路に立つ日本

中嶋 中国はこれから「国家外交」から「革命外交」への転換というようなニュアンスを強めるんじゃないでしょうか。国交を正常化したマレーシアについても、ゲリラ勢力を鼓吹するような『人民日報』の報道がぼつぼつ出始めている。逆にソ連は東南アジアではあまり大騒ぎになってもいいじゃないでしょうか。

最後に日本の問題ですけれども、インドシナ情勢は決して対岸の火災視できない問題を持っていると思う。日本は最近ASEANにゲタを預けているような形ですが、ASEANには第二、第三のベトナムになりたくないというように、いわば大国外交の犠牲にされたくないというような共通認識のもとに出発した一種のリーダーリズムがある。かつてアメ

リカの反共体制に組み込まれていた東南アジア諸国とは違う面を持っていますから、今後のインドシナ情勢にはかなり柔軟に対応するんじゃないか。そうしますと、日本がASEANとの経済関係の上だけにあぐらをかいてはいられないような状況が出てくる。日本も重大な外交的岐路に立たざるを得ないでしょう。

陸井 デタントには、はじめから日本が一枚かんでいますね。具体的にいうと、例えば朝鮮情勢を三八度線で凍結することにについては、南半分を日米で、北半分を米中、米ソの関係で、それぞれ処理するという暗黙の了解があったと思うのです。

第三世界の重視を口先ではとどめるのですが、現実には、例えば今の日本の不況の波をかぶっているのは東南アジアです。日本の資本は下請けの東南アに意識的にしわ寄せしている気配がある。日本に住んでいる人はあまり知らないけれど、ずいぶん第三世界を犠牲にしている

ということを忘れてはいけません。中嶋 結論的にいえば、キッシンジャーは大関係を変えて改善したうえで、第三世界を意図的な流動状態に置き、これをアメリカ主導型の大国間の話し合いで再編成しようとしたんだと思います。この再編成過程で挫折した。第三世界が騒然となり、せつかつくつた大関係にも響いてきはじめた。アメリカとしては、もう一度新しいワケ組みをつくらなきゃならない。しかし第三世界が第三と第四の二つの領域に分かれるとか、中ソ対立がインドシナなどで露骨に出てくるとか、いろんな不安定要因があって、一種の混沌といえますか、世界的な流動化が始まっています。

その点、中国のいうように天下大乱の兆候ですが、この大乱は中国自身にも例外で眺めてはられないような問題を突きつけるでしょうね。特にアジアでは、そうなるという感じがします。

(写真・W.P.)

●世界と結ぶ国際理論・情報誌

5月号

特集 世界社会主義の優越性

中東でもインドシナでも、帝国主義勢力とそのカライイは後退を余儀なくされ、世界資本主義の地歩は大幅にやわまった歴史の時期をむかえていく。今や社会主義は、政治的にも経済的にも資本主義にたいして優越していることを実例の力によって万人に示している。

- 今日の世界発展における社会主義の役割：ポノマリヨフ
- 国際経済統合の二つの型：ボゴモロフ
- 社会主義的な国際主義とヒューマニズム：バグラモフ
- 勝利の主要な要因：シュエコフ元帥
- 大祖国戦争の時期におけるソ連外交：ロザノフ
- フアシズム破壊三〇年……山本洋二
- 諸国民の根本的利益にそむいて……「アラウダ」
- 政治的危機深まるスペイン……小峰照雄
- 世界海洋の調査にかんするソ米協力……ビーサレフ
- 反共の一教義の終末……バルホメンコ
- 社会主義経済統合と勤労者の福祉……カルピチ
- 世界海洋と国際法……ヤロスラフツェフ

政治上の妥協にたいするレーニンの態度

エリ・スピリン

新世界ノト

定価三〇〇円 (ハガキで申込みの方に見本誌贈呈)

東京都千代田区神田神保町2-9
三栄社 電話261-1916
振替東京22720

報道
解説
評論

朝日ジャーナル

1975
Vol.17
No.16 180
4・18

不完全燃焼の祭典—都知事選 井出孫六

大流動の時代はじまる 陸井三郎／中嶋嶺雄

特集 あなたの辞書はいかが

大野晋・川本茂雄・三宅鴻

